

高尾山物語 7

異人來りて御尊像を刻む

絵・橋本豊治



一夕、異人來りて曰く。我、之を能くす。乃ち山西の窮谷巖石の間に於いて慮し、人の之を規うを許さず。

寛延の高尾山縁起より
『高尾山薬王院の歴史』外山徹 十五頁

俊源大徳は夢に現れた飯縄大権現を祀る使命を託されたと思ひ、その御尊像を刻もうと努力しますが、思うようにいきませんでした。

ところがある晩、突然異人が俊源大徳のもとを訪れ、自分ならば飯縄大権現の御尊像を彫ることが出来るかと告げました。

この「異人」とは、通常外国人を意味する言葉ですが、ここでは仏神が変じた姿か、飯縄大権現の教え伝道した存在であると考えられます。

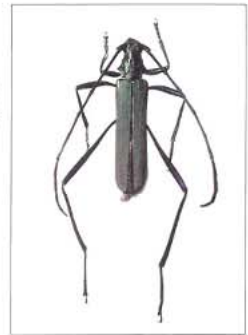
その異人は炊谷（高尾山西方の峽谷の岩の狭間）に庵を構えて仮住まいして、御尊像を刻み始めました。

異人は余人が訪れることを禁じ、人目を避けて彫り続け七日間、すなわち一週間後、ついに尊像が完成しました。

甘え我儘
自分にとつて
何の益にも
ならぬもの

高尾山の昆虫

ミドリカミキリ



ミドリカミキリは比較的身近で見られる美しいカミキリです。体色は名前のとおり緑色が基本ですが、全身が緑の個体は意外に少なく、少なからず赤銅色の金属光沢を帯びる傾向が強いようです。

都心部の公園から山地にかけて広域に分布し、高尾でもガマズミの花やクヌギやコナラ等の樹幹に止っているのをよく見かけます。

アオカミキリやミドリカミキリの仲間には美麗種であり、芳香も出すとも言われていますが、私は臭覚が弱いのか感じたことがありません。

だいぶ前ですが、夜間の灯火にホソカミキリと思えるカミキリがいるので近づいてみると、ミドリカミキリの大型のオスで驚きました。

本種のバッタを思わせるような異常に長い後肢は、シルエト的に地味なホソカミキリそっくりでしたが、夜行性のホソカミキリとは異なり本種は典型的な昼行性と思われただけに、意外な印象です。

青や緑は人の心を癒やす効果があるようで、ミドリカミキリはやはり昼間の陽光の中、メタリックに輝きながら動き回っている姿が似合います。

(撮影・文松島 孝)

おはなし散歩道 気のいいタヌキ

町田市 大澤 桃代

気のいいタヌキがおつた。食い物見つけてもカラスや野兔に取られちまったり、ネコやネズミに譲っちまったりしたから、いっつも腹空かしておつてよ、いっつまでたつても、ちっこくて弱いままじやつた。

空の上から、天狗様がそんなタヌキを見ておつた。優しいけれど、仲間はいねえし、やせておるしで、目が離せなくてな、タヌキの行くところ行くところについて行つた。

ある秋の日、タヌキは農家の庭先で欠碗を見つけた。葉とトウモロコシが入つたから、喜んで碗に顔を突っ込んだ。

とたん、コッココッ！と、鶏に突かれた。エサ盗るつもりはねえで、「鶏どん、ごめん」って、

タヌキはわびたげんと、鶏は突つてくる。タヌキはホウホウの体で山へ登つた。

山にはドングリがいっぺえあつてよ、タヌキは嬉くて、実に食らいついたんじやと。ガツガツ頬張っている、キユロロと鳴くものがあつた。キユロロ、キユロロ、鳴き声はどんどん近くなるけれど、タヌキは食うに夢中で、気がつくの遅れたんだな。いきなり、キキーツ、って甲高え鳴き声をして、鋭い爪がタヌキの頬を引つかったんじやと。

痛え！って辺り見回すと、タヌキはリスの群れの中にいたんだ。辺りはリスの餌場で鳴き声はリスじゃんだな。「リスどん、ごめん」タヌキは言つて、逃げだしたと。

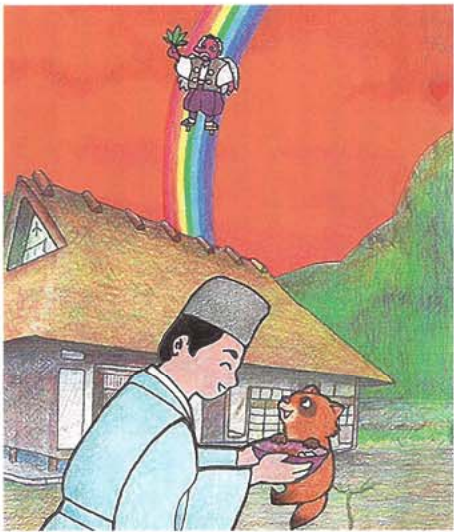
山道下つてゆくと、谷川あつて、タヌキは水飲んだと。うめえうめえ、ってな。

ふつと、水すくつた手ん中見ると、ちっこいヤマメが泳いでる。タヌキはあわてて逃がしてやつた。それから、ヤマメをすくわねえように。気がいつけて水飲んだんだと。

空つ腹かかえて、タヌキはしょんぼり山を下つた。悪いことに、雨まで降つてきて、じつとり濡れちまつた。

でっかい銀杏が見えたんで、タヌキは走つた。雨宿りすべえってな。そこは神社じやつた。古くてさびれてるけれど、神様はおられるに違えねえ。タヌキは「食い物くだせえ」って、お祈りしたと。

とたん、雨が止んで、空が明るくなつた。何だんべ、って見上げると、茜色の空に虹がかつてた。夕焼けと虹が、あんまり見事できれいだつたんで、タヌキはすっかり見とれておつた



ちまつた。

すると、ガラガラって、きしんだ社務所開いて、「何事じやな」って神主が顔出した。神主は目丸くして虹とタヌキを代わる代わる見ておつたが、いきなり、「天狗様じや！」って叫んで、銀杏の木を指さした。

タヌキも銀杏を見たら、茜の空に虹を背負つて、天狗様が浮かんどつた。天狗様は「殺生しねえ感心なタヌキじや」って言つて、すうーと消えた。

(挿し絵・小出 茂)